

# 拜啓、上野瞭様。

世界を拓げるといふこと

——上野瞭論・序章

相川 美恵子

## 1 拜啓、上野瞭様

拜啓、上野瞭様。初めまして、ではないのは、今から二五年ほど前にあなた（こう、呼ばせて頂くのをお許し下さい）を、遠目に何度もお見かけしているからです。覚えていらっしやらないでしょうが、大学を卒業して間もない頃、私は当時あなたが勤めていらした大学のあなたの研究室に厚かましくも電話を掛け、幸運なことにその時あなたはたまたま研究室におられて受話器を取って下さり、お金はないけれどもあなたの授業を受けたいという、これまた厚かましい私の申し出に、「かまへんよ」と言って下さったのでした。そうして私は、京都へ行くことになりました。あなたは大教室の底にマイクを握って立っておられ、私はすり鉢状にせり上がった教室の上の方から、毎週あなたをのぞき込むように見ていました。ああ、この人が『目こぼし歌こぼし』（あかね書房 七四年）の上野瞭なのだ胸を躍

らせながら。

## 2 八〇年前後

ご存じのように、今から二五年程前、つまり八〇年前後というのは、日本の児童文学が大きく揺さぶられていた時期でした。八〇年、雑誌「群像」新年号に発表された柄谷行人の「児童の発見」と、同年に邦訳出版されたフィリップ・アリエスの『〈子供〉の誕生』（みすず書房）は、子どもという概念が歴史の産物であることを論証し、新鮮な衝撃を与えました。「日本児童文学」七八年五月号が「タブーの崩壊」と題した特集を組んだように、内側からも、それまでは取り上げられることのなかった離婚や自殺、性などをテーマにした作品が生み出されるようになっていました。八〇年に出た那須正幹の『ぼくらは海へ』（偕成社）はその象徴とも言えます。校内暴力、いじめなどが多発し、社会問題化した「世界」八一年二月号は「子供という問題」